

形あるものは失っても ～東日本大震災 記憶から記録へ～

陸前高田市立気仙中学校

校長 越 恵理子

1 あの日 あの時

3月11日午後2時46分、岩手県沖から茨城県沖を震源域とするマグニチュード9.0の地震によって発生した巨大津波は、本校の生徒をはじめ、多くの人から本当に大切な多くのものを奪い去ってしまった。

本校は校舎の側面がすぐ堤防で、漁火、サケの遡上などを含め広く広田湾の風光明媚な姿を校舎のほとんどの場所から見る事ができたという立地条件であった。3月11日、本校はちょうど卒業式に向けて体育館において全校で合唱練習に取り組んでいた。地震の発生とともに体育館の壁が崩れてきたため、即座に校庭を挟んだ200メートルほど先の第一避難所となっている旧博物館の駐車場に生徒を避難させた。各教室に生徒が残っていないか、暖房の火を確認し、職員室、校長室に施錠して避難した。急激に気仙川の水位が下がりだしたこともあり、さらに高い位置に生徒を避難させたがそこも危険な状態にあったため、さらに上の山肌に生徒を避難させた。津波が堤防を越え始め本校の校庭に真っ先に入り、高田松原の松原の松林に迫り始めた。そこでさらに上のスギ杉林の中に生徒を入

れ、担任を中心として寄り添い、励まし続けた。最終的に四ヶ所避難場所を変えたことになる。

2 避難所生活

第一波の引き波の後、近くの二日市公民館に入り、その晩は生徒におにぎりや味噌汁を食べさせることができた。二枚の毛布を三人の生徒で使用し、余震の恐怖と寒さに震えながら二晩そこで過ごした。担任と女性教職員は生徒へのかかわりを中心に、それ以外の男性の教職員は公民館前に地域の方々と火を焚いて次々に避難してくる人たちを迎えた。三日目に長部小学校の避難所に移動した。避難所では、避難所生活を軌道に乗せるまで、支援物資の運搬、トイレの水用のプールからの水汲み、衛星電話の受付などの仕事をほとんど本校の職員と生徒が中心となって働いた。最後の生徒を保護者にお返しするまで12日間を要した。

3 再出発

3月31日長部小学校の浜っこホールをお借りして3年生への卒業証書渡しを実施した。盛岡方面に避難していた生徒も、今回の震災で兄を



本校を襲う津波 午後3時23分



卒業式で合唱を披露する3年生 3月31日

失った生徒も全員が揃うことができた。式後、保護者からの挨拶の中で話された「全員の子供たちの命を守ってくださりありがとうございました」という言葉は、私たち気仙中教職員にとっての大きな心の財産になった。それと同時に、生徒といたことで私自身も生かされたのだと実感した。

本校の再出発に向けて、卒業式の実施後、次年度の気仙中学校の再建について生徒、保護者への説明会を実施した。矢作中学校の校舎が平成22年度末で閉校予定となることから、その校舎を利用すること、スクールバスでの登下校となること、4月20日の始業式を目指して進めることなどを説明した。

学校を再開するにあたって次の三点について配慮して取り組んだ。一つ目は生徒の心のケアである。人事異動が凍結になったこと、学校カウンセラーが配置されたこと、学校支援カウンセラーや巡回型カウンセラーが配置されたことはたいへんありがたいことであった。二つ目はスクールバスでの登下校指導である。当面教職員が分担してスクールバスに乗り、スクールバスの利用の仕方について指導を重ねた。三つ目は極力普通の学校生活を送らせることである。家を失っても、大切なものを失っても普通通りに学校生活を送れるということを実感させることで、生徒に安心感を持たせたいと考えた。

4 多くの方々に支えられて

制服も教科書も校舎も失ってしまった生徒ではあるが、本当に多くの人たちの励ましや支えのおかげで、笑顔を取り戻し元気に活動できるようになった。入学式では「NPOみんつな」の方々に入学式の写真撮影をしていただいた。多くの団体、個人から、制服、運動着、靴などの支援をしていただいた。提供していただいた木材で椅子を製作し、文化祭で展示することができた。市内音楽祭も市内校長会の後押しと各担当者の尽力により、住田町の会場をお借りして実施することができた。

感謝の気持ちを形で示そうと、全校で制作し



全校生徒で制作した立て看板（国道に設置）

た「ありがとう 力強く前へ」という立て看板を国道から本校へ入る角に設置した。「気仙中生徒会復興宣言」として「形あるものはすべて失ったけれど、自分たちの心の中にある形のない文化を引き継いで繋いでいこう」とまとめられ、挨拶、太鼓、合唱、応援など形のない文化がしっかりと引き継がれ繋がれていっている。また、自分たちを支え励ましてくださった方々への礼状作成など、一つ一つの取り組みを通して、仲間との絆を深め、人の温かさに触れ、人の優しさをしっかりと心に刻んでいる。

これまでの歩みを振り返ってみれば私たち大人が子どもたちからたくさんのエネルギーをもらっていることに気づかされる。厳しい環境にありながらも精一杯前を向いて明るく歩いていこうとしている子どもたちに、たくさんの感動を与えてくれる子どもたちに今感謝の気持ちでいっぱいである。今後も険しい道のりは続くと思うが、子どもたちの未来に多くの光が差し込んで欲しい。

